

女子大学生のキャリアプランと「自立」の関連

— 心理的・社会的・経済的側面を含めて —

松 並 知 子^{*1} 荻 野 佳 代 子^{*2}

The Relationship between Career-plan Choices and Independence of Female Undergraduate Students:
Psychological, Social and Economic Independence

MATSUNAMI Tomoko^{*1} OGINO Kayoko^{*2}

*1 神戸女学院大学 人間科学部 心理・行動科学科 非常勤講師

*2 神奈川大学 人間科学部 教授

連絡先：松並知子 matsunamitomoko@u01.gate01.com

要 旨

本研究は、女子大学生の将来のキャリアプランと心理的・社会的・経済的な自立の関連を検討することが目的であった。365名の女子大学生を対象に彼女らのキャリアプランと自立、職業観、依存的自己愛の関連について分析した結果、結婚・出産後も就労継続を予定する人は、自立尺度の下位尺度である『社会的関心』得点と『生活身辺処理』得点が有意に高いという結果が得られた。一方、出産せずに就労継続を予定する人は、自立尺度の『協調的対人関係』得点と『親子の信頼関係』得点、および、職業観尺度の『人間関係』得点が有意に低いという傾向が見られた。さらに、自立尺度の『主体的自己』や『経済的自活』は本来、就労継続に関連する要因と考えられるが、本研究ではキャリアプランとの関連は見られなかった。以上のことから、女子大学生を対象に、自立とエンパワーメントを促すような、女性のためのキャリア教育が必要であると考えられる。

キーワード：自立、キャリアプラン、職業観、女子大学生、依存的自己愛

Summary

The purpose of this study was to explore the relationship between career-plan choices of female college students and their psychological, social and economic independence. This research on 365 female college students examined the relationship among their career-plan choices, independence, occupational values and pathological narcissism (dependence). As a result, students hoping to continue working after marriage and childbearing showed strong 'social interests' and 'self care activity' of the independence scale, while career-oriented students with no intention to childbearing displayed weak 'cooperative human relationships' and 'parent-child relationships of trust' of the independence scale, and also weak 'human relationships' of the occupational values scale. The result suggested career education which focuses on empowering students to establish their independence.

Keywords: Independence, Career-plan Choices, Occupational Values, Female Undergraduate Students, Pathological Narcissism (Dependency)

問題と目的

ニートやフリーターが社会問題となっている現在、若者の自立や親からの独立は社会的関心を集めるテーマとなっている。しかし、「自立」の概念を心理学的にどのように捉えるかはほとんど明らかにされておらず、その時々文脈に応じて使い分けられている（神谷，1993；高坂・戸田，2006）。たとえば、高坂（2003）は、自立とは成人期において適応するために必要な心理・社会的な能力を備えた状態であるとし、渡邊（1995）は、自立とは他者依存を完全に断ち切るのではなく、他者と相互に支え合いながら自分の力で一人立ちすることであると述べている。また複数の自立尺度が開発されているが、その側面は多様である。たとえば、高坂・戸田（2006）は心理的自立を行動・価値・情緒・認知の4側面から捉え、「価値判断・実行」、「自己統制・客観視」、「現在把握・将来志向」、「適切な対人関係」、「社会的知識・視野」の5つの因子を抽出している。また神谷（1993）は、「統合的依存性」と「独立性」の2因子から成る女性における自立尺度を作成している。これまでの心理学的研究では、心理的・社会的自立に焦点が当てられることが多かったが、渡邊（1995）は、男性が軽視している生活身辺自立や対人関係能力の側面にも注目すべきであると指摘している。そこで、本研究では、「心理的自立」「経済的自立」「社会的自立」「生活身辺の自立」「親からの自立」という多様な側面で構成された自立尺度（大石・松永，2008）を用い、女子大学生にとっての「自立」とは何かを検討する。

近年、中高年女性だけでなく、若年女性の非正規雇用も増加しているが、女性の場合、男性ほど問題視されない傾向がある。しかし、男女で比較すると、貧困率は女性の方が高く、シングルマザーの貧困は大きな社会問題となりつつある。そのような状況で、女性が貧困化するのを防ぐためには、学生時代から心理的・社会的・経済的に「自立」しており、将来のキャリアプランをしっかりと持っていることが重要であると考えられる。また、学生時代に「自立」していることは、今後の人生における「自立」にどう影響するのか、「自立」のどの側面がキャリアプランと関連しているのかなどを検討することで、女子大学生にとって何が重要で、何が不足しているかを明らかにすることができるであろう。

生涯にわたり自立した人生を送るためには、職業を持ち続けることが必要であり、各教育機関で実施されているキャリア教育では職業観・勤労観を育成することが重要であるとされている。職業観とは、職業をもつことに対する個人の見解、考え方、価値観、認識、印象、期待の総称であると定義されており（加藤・小倉・安立，2011）、個人の生き方の基盤を形成する重要な概念であるとされている（小川・中島，2015）。では、職業観は「自立」とどのように関連しているのだろうか。また、キャリアプランにはどう影響するのかについて検討したい。

「自立」は精神的適応性とも関連があると考えられる。大石・松永（2008）は、自立尺度の7因子すべてと自尊感情得点との間に有意な正の相関が認められたことを報告している。そこで、本研究では、男女を比較すると、女性がより高い得点を示す依存的自己愛を不適応性の指

標として用いる。「自分はありのままの自分でいいんだ」と感じられるような「基本的信頼感」が低い場合、女性は特に依存的自己愛が高まり、他者と一体化しようとして「しがみつく」傾向があることが報告されている（松並，2014）。「自立」している女性は、そのような依存的自己愛は低いと予測される。

本研究では、まず心理的・社会的・経済的側面を含んだ「自立」の要因を検討し、それが将来のキャリアプランや職業観、依存的自己愛とどのように関連しているのかについて、また職業観とキャリアプラン、依存的自己愛との関連についても検討する。それにより、女子大学生の自立に向けたキャリア教育への示唆を得ることを目的とする。

方法

調査対象者および手続き

2014年1月、関西および関東の大学、短期大学において、女子大学生を対象に、授業時間内に質問紙調査を実施した。有効回答数は365名、平均年齢は19.53歳（ $SD = 1.25$ ）であった。

調査内容

1. 将来のキャリアプラン

「あなたは将来、どのような働き方をするつもりですか？」という質問に対し、7つの選択肢から1つだけを選択することを求めた（Table 1）。厚生労働省の調査（2013）では、「専業主婦コース」「再就職コース」「両立コース」「DINKSコース」「非婚就業コース」の5つのキャリアプランが挙げられている。しかし、再就職に際しては正規雇用での復職を予定するのか、非正規雇用での復職を予定するのかの2パターンが考えられること、また、「結婚はしたくないが子どもは欲しい」という希望を持つ人がいることを考慮して、全部で7つのキャリアプランを設定した。

Table 1 将来のキャリアプランの選択肢

1. 非婚・子ども無・就業継続
2. 非婚・子どもあり・就業継続
3. 結婚・子ども無・就業継続
4. 結婚・子どもあり・就業継続
5. 結婚・子どもあり・専業主婦
6. 結婚・子どもあり・仕事中断→正規雇用
7. 結婚・子どもあり・仕事中断→非正規雇用

2. 自立尺度

大石・松永（2008）による32項目（5件法）を用いた。「主体的自己（9項目）」、「協調的対人関係（5項目）」、「社会的関心（3項目）」、「生活管理（5項目）」、「生活身辺処理（3項目）」、「経済的自活（3項目）」、「共生的親子関係（4項目）」の7下位尺度より構成され、「まったくあてはまらない～かなりあてはまる」までの5件法により評定を求めた。

3. 職業観尺度

加藤ら（2011）による24項目を用いた。生活の安定（7項目）、人間関係（5項目）、自己実現（6項目）、社会貢献（3項目）、否定的職業観（3項目）の5因子により構成され、「あなたは将来の仕事について、どのように考えていますか」という質問に対し、「全くあてはまらない～かなりあてはまる」の5件法により評定を求めた。

4. 仲間集団への依存尺度（以下、PGDと記述する）

依存的自己愛を測定するものとしてLapan & Patton（1986）が作成し、中西・葛西（1992）が邦訳した8項目を用い、「全く当てはまらない～とてもよく当てはまる」の5件法で回答を求めた。この尺度は、「私が尊敬している人が、私を突き放したりはしないかと気がかりである」、「人からの判断は、自分自身についての私の感じ方を左右しがちである」、「私は、より強い人にひかれがちである」など仲間への依存度や依存的自己愛を測定する項目で構成されている。

結 果

1. 自立尺度、職業観尺度、PGDの検討

自立尺度32項目に対し因子分析（主因子法、Promax回転）を実施した。固有値の減衰状況から6因子が抽出され、因子負荷量が.35以下の6項目を削除し再分析を行った。さらに、負荷量の低い1項目「早く親から独立したい」を削除し、最終的に25項目6因子を採択した（Table 2）。第1因子は、「親のことを信頼している」など大石ら（2008）の「共生的親子関係」の項目と、「自分の意志を親にはっきりと言える」など「主体的自己」の項目が混合して構成され、『親子の信頼関係（5項目）』（ $\alpha = .79$ ）と解釈した。第2因子以降は大石ら（2008）の因子とほぼ合致し、「他人の気持ちを思いやることができる」などの項目から成る『協調的対人関係（4項目）』（ $\alpha = .82$ ）、第3因子は「社会の出来事に関心がある」などの『社会的関心（5項目）』（ $\alpha = .75$ ）、第4因子は「自分のことは自分で判断する」などの『主体的自己（4項目）』（ $\alpha = .77$ ）、第5因子は「自分の洗濯物は自分で洗濯する」などの『生活身辺処理（3項目）』（ $\alpha = .74$ ）、第6因子は「自分で生活できるだけの収入を得ているなどの『経済的自立（4項目）』（ $\alpha = .56$ ）であった。一方、大石ら（2008）の「生活管理（5項目）」の因子は抽出されなかった。それぞれの因子に負荷量が高い項目の合計得点を下位尺度得点とする。

職業観尺度24項目に対し因子分析（主因子法、Promax回転）を実施した。固有値の減衰状況から5因子が抽出され、因子負荷量が.35以下の2項目を削除し再分析を行った。その結果、22項目5因子を採択した（Table 3）。第1因子は、「人々とのつながりを実感するような仕事をする」など加藤ら（2011）と同様の項目から成る『人間関係（5項目）』（ $\alpha = .84$ ）であった。第2因子には、「社会のためになる仕事をする」など、加藤ら（2011）では「社会貢献」因子に含まれていた項目と「仕事でみとめられるようになる」という「自己実現」因子に含まれていた項目が見られたため、『やりがい（4項目）』（ $\alpha = .83$ ）と名付けた。第3因子は、「経営が安定している職場で働く」などから成る『経済的安定（5項目）』（ $\alpha = .76$ ）、第4因子は、「辛い仕事はなるべく避ける」などの「否定的職業観」（加藤ら，2011）と「プライベートに支障

Table 2 自立尺度の因子分析結果 (Promax 回転後の因子パターン)

項目内容	I	II	III	IV	V	VI
1. 親子の信頼関係 ($\alpha = .79$)						
(28) 親のことを信頼している	.83	-.07	-.03	-.07	.00	-.06
(29) 親は自分のことを信頼している	.80	.00	-.04	-.02	.08	-.01
(31) 自分の意志を親にはっきりといえる	.68	.01	-.08	.08	.00	.03
(30) 親には親の、自分には自分の考えがある	.48	-.04	.10	.08	-.04	.08
(12) 自分の居場所がある	.40	.18	-.04	.10	.01	-.01
2. 協調的対人関係 ($\alpha = .82$)						
(6) 相手の気持ちを察して、適切な対応ができる	-.14	.82	-.07	.10	-.03	-.01
(5) 他人の気持ちを思いやることができる	-.02	.77	.00	-.07	-.07	.01
(8) 周りの人と良い関係を維持することができる	.07	.72	-.04	.00	.05	.00
(7) 周りの人と協力して物事に取り組むことができる	.09	.65	.08	-.06	.02	-.01
3. 社会的関心 ($\alpha = .75$)						
(18) 社会の出来事に関心がある	.10	.01	.83	-.12	-.07	.01
(20) 日本の政治に関心がある	-.08	-.09	.79	.04	.09	-.14
(19) 社会的に広い視野を持っている	.14	.04	.58	.05	-.05	.07
(21) 新聞を読む	-.27	-.05	.50	.13	.04	.05
(22) 社会の一員としての自覚を持っている	.00	.18	.35	-.02	.07	.17
4. 主体的自己 ($\alpha = .77$)						
(2) 自分のことは自分で判断する	.03	-.09	-.05	.80	-.09	-.02
(3) 自分で決めたことを行動にうつせる	.00	.00	-.03	.75	.04	.06
(4) 自分の言動に責任を持てる	-.05	.17	.06	.56	.12	-.05
(1) 自分の考え、意見を持っている	.11	-.03	.14	.55	-.08	-.07
5. 生活身辺処理 ($\alpha = .74$)						
(24) 自分の洗濯物は自分で洗濯する	.00	-.01	-.03	-.05	.93	.03
(25) 日頃の自分の食事は自分で作る	-.02	-.09	.05	.00	.75	.04
(23) 自分の部屋の掃除は自分でする	.14	.10	.05	.03	.44	-.14
6. 経済的自活 ($\alpha = .56$)						
(17) 将来に備えて蓄え(貯金など)をしている	.06	.00	.07	-.03	-.13	.54
(13) 自分で生活できるだけの収入を得ている	-.05	-.06	-.15	.07	.08	.54
(14) 自分で使うお金の月々の収支を把握している	.09	-.01	.05	.07	.06	.50
(16) 家にお金を入れている	-.07	.04	.02	-.13	-.02	.46
因子間相関	I	II	III	IV	V	VI
I	—	.48	.36	.38	.06	.04
II		—	.25	.34	.09	.10
III			—	.40	.15	.26
IV				—	.15	.35
V					—	.30
VI						—

がでない働き方をする」などの項目から構成されていたため、『プライベート重視 (5項目)] ($\alpha = .66$) と解釈した。第5因子は、「性別による差別がない仕事をする」など男女平等の仕事・職場についての項目から構成されていたので、『男女平等の環境 (4項目)] ($\alpha = .77$) と命名した。それぞれの因子に負荷量が高い項目の合計得点を下位尺度得点とする。

PGDは先行研究同様、1因子構造であった。

2. 各尺度の相関の検討

PGD、および、自立尺度の各下位尺度、職業観尺度の各下位尺度、それぞれの相関を検討した。結果を Table 4に示す。PGDと自立尺度の関連では、『主体的自己』と『経済的自活』

Table 3 職業観尺度の因子分析結果 (Promax 回転後の因子パターン)

項目内容	I	II	III	IV	V	
1. 人間関係 ($\alpha = .84$)						
2. 人々とのつながりを実感するような仕事をする	.93	.01	-.02	-.03	-.12	
6. 仕事上で人とのつながりを実感する	.86	.02	-.07	.14	.00	
21. 人との出会いが多い職場で働く	.66	-.03	.18	-.16	.01	
1. 仕事を通じて自分らしさを発揮する	.51	.30	-.05	.02	-.03	
15. 職場で周囲の人々との信頼関係を築く	.39	.10	-.03	.21	.17	
2. やりがい ($\alpha = .83$)						
13. 社会のためになる仕事をする	.11	.73	.00	.05	.00	
10. 社会の一員として仕事にたずさわる	-.03	.69	.01	.01	.17	
7. 仕事を通して社会へ貢献する	.27	.56	-.06	-.02	.02	
11. 仕事でみとめられるようになる	.26	.49	.13	-.08	-.05	
3. 経済的安定 ($\alpha = .76$)						
12. 経営が安定している職場で働く	.05	.21	.68	.00	-.01	
24. 給料がよい仕事をする	.01	-.14	.67	-.04	.17	
20. 経済的な安定のために働く	.06	-.12	.56	.21	-.06	
5. 労働条件がよい仕事をする	.06	-.01	.52	.25	-.04	
8. 雇用が安定している大きな組織で働く	-.14	.34	.46	.01	-.08	
4. プライベート重視 ($\alpha = .66$)						
14. 辛い仕事はなるべく避ける	-.17	.00	.20	.58	-.07	
18. 重要な責任を負う仕事はしない	-.26	.07	.04	.55	-.08	
3. プライベートに支障がでない働き方をする	.14	-.02	-.04	.51	.12	
19. 家族や友人と一緒に過ごせる時間が多くとれる働き方をする	.23	-.21	.12	.47	.09	
4. 報われない仕事はしない	.01	.13	-.04	.42	.01	
5. 男女平等の環境 ($\alpha = .77$)						
9. 性別による差別がない仕事をする	-.09	.07	-.03	.07	.73	
22. 性別に関わりなく活躍できる職場で働く	-.01	.00	.21	-.22	.70	
16. 昇進や研修の機会が男女平等である職場で働く	.02	.07	-.10	.18	.69	
	因子間相関	I	II	III	IV	V
	I	—	.59	.13	-.09	.56
	II		—	.23	-.01	.53
	III			—	.54	.31
	IV				—	.00
	V					—

Table 4 PGD、自立尺度、職業観尺度の相互相関

	PGD		自立尺度					職業観尺度				
	親子の信頼関係	協調的対人関係	社会的関心	主体的自己	生活身辺処理	経済的自活	人間関係	やりがい	経済的安定	プライベート重視	男女平等の環境	
PGD	—	.01	.18**	-.03	-.15**	.01	-.16**	.25***	.16**	.16**	.13*	.11
自立尺度												
親子の信頼関係	—	.39***	.26***	.38***	.11*	.06	.37***	.33***	.09	.05	.30***	.18**
協調的対人関係		—	.20***	.29***	.07	.06	.48***	.31***	.15**	-.03	.18**	.10
社会的関心			—	.37***	.17**	.23***	.17**	.21***	-.07	-.18**	.10	.10
主体的自己				—	.13*	.22***	.22***	.23***	.00	-.03	.20**	.07
生活身辺処理					—	.19***	.12*	.14*	-.02	-.09	.07	.07
経済的自活						—	-.12*	-.06	-.09	-.10	-.02	-.02
職業観尺度												
人間関係							—	.67***	.17*	-.04	.48***	.48***
やりがい								—	.24***	-.01	.52***	.52***
経済的安定									—	.50***	.29***	.29***
プライベート重視										—	.05	.05
男女平等の環境											—	—

* $p < .05$. ** $p < .01$. *** $p < .001$

との間に弱い負の相関、『協調的対人関係』との間に弱い正の相関が見られた。また職業観尺度との関連では、『男女平等の環境』以外の下位尺度との間に、弱い正の相関が見られた。依存的自己愛が強い人は、主体的な自己をもつことや経済的に自立する傾向は弱いだが、人間関係を良好に保ち、仕事においても人間関係を重視する傾向があると考えられる。一方、男女平等の職場環境を期待する傾向や、親との間に信頼関係を築けていると認知する傾向との関連は見られなかった。

自立尺度の下位尺度間の相関では、『親子の信頼関係』、『協調的対人関係』、『社会的関心』、『主体的自己』の4つは相互に相関が見られ、親との関係が良好な人は、協調的な対人関係を築きやすく、主体的な自己をしっかりと持っている、また社会への関心も強いという傾向が見られた。一方、家事などに関わる『生活身辺処理』は他の下位尺度との関連がほとんど見られなかった。また、金銭に関わる自立を表す『経済的自活』は、『社会的関心』や『主体的自己』、『生活身辺処理』とは相関が示されたが、『親子の信頼関係』、『協調的対人関係』とは関連がなかった。

職業観尺度の下位尺度間の相関では、『人間関係』と『やりがい』、『男女平等の環境』に関連が見られた。また、『プライベート重視』の職業観を持つ人は『経済的安定』を期待する傾向が見られた。

自立尺度と職業観尺度との関連では、自立尺度の『親子の信頼関係』、『協調的対人関係』、『主体的自己』は、職業観尺度の『人間関係』、『やりがい』、『男女平等の環境』との相関が見られ、親との信頼関係や協調的な人間関係を持ち、主体的に行動できる人は、やりがいのある仕事をもち、仕事がしやすい職場環境を期待することが示唆された。一方、『経済的自活』や『生活身辺処理』は職業観尺度との関連がほとんど見られず、金銭や家事に関する自立は職業観とはほとんど関連がないと考えられる。職業観尺度の『プライベート重視』は、自立尺度の『社会的関心』とのみ弱い負の相関が見られたことから、仕事よりもプライベートな生活を重視する職業観は自立とは関連がほとんどないことが示唆された。

3. キャリアプラン選択率

「7. 結婚・子どもあり・仕事中断→非正規雇用」を選択した人が僅差で最多であり、次いで「4. 結婚・子どもあり・就業継続」が多かった (Table 5)。職業を継続するかどうかの比較では、キャリアプラン1～4の継続志向が全体の37.7%、5～7の退職・中断志向が62.3%となっており、結婚・出産を経験した後、仕事を継続することを希望しない、あるいは断念せざるをえないと考えている人が6割以上いるという傾向が見られた。また中断後、仕事に復帰する際、正規雇用を予定する人は全体の18.2%に対して、非正規雇用を予定する人は33.5%となっており、正規雇用での復職は負担が重い、あるいは、正規で雇われるのは不可能と考えている人が多いことが示唆された。

非婚・既婚の比較では、「2. 非婚・子どもあり・就業継続」を選択した人はひとりもおらず、非婚予定の人は全体のわずか5.3%であった。また、子ども有・無の比較では、キャリアプラン1と3を選択した子どもを持たない予定の人は全体のわずか7.8%であり、多くの女子大学生は結婚して子どもを産むという「標準型」のライフコースを志向している傾向が見られた。

Table 5 四年制・短大別のキャリアプラン選択率

キャリアプラン	全体 (%)	四年制 (%)	短期大学 (%)
1. 非・子無・継	19 (5.3)	12 (6.8)	7 (3.9)
2. 非・子有・継	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
3. 結・子無・継	9 (2.5)	9 (5.1)	0 (0.0)
4. 結・子有・継	107 (29.9)	65 (36.7)	42 (23.2)
5. 結・子有・主婦	38 (10.6)	15 (8.5)	23 (12.7)
6. 結・子有・再 (正)	65 (18.2)	24 (13.6)	41 (22.7)
7. 結・子有・再 (非)	120 (33.5)	52 (29.4)	68 (37.6)
合計	358	177	181

注：キャリアプランの選択肢は略記であり Table 1を参照

χ^2 検定の結果、四年制大学・短期大学別の選択率には有意に偏りが見られた ($\chi^2(5) = 23.48, p < .001$)。残差分析を行ったところ、「3. 結婚・子ども無・就業継続」と「4. 結婚・子どもあり・就業継続」は四年制大学の学生が有意に多く ($p < .01, p < .01$)、「6. 結婚・子どもあり・仕事中断→正規雇用」は短大生が有意に多かった ($p < .05$)。

学年別でも、1、2年生を低学年、3、4年生を高学年として、 χ^2 検定を実施したが、有意な偏りは見られなかった ($\chi^2(5) = 6.67, n.s.$)。

4. キャリアプラン別の検討

キャリアプランを独立変数に、自立尺度の各下位尺度を従属変数として、分散分析を実施した。その結果、4つの下位尺度に有意差が示された (Table 6)。多重比較 (Turkey 法) を実施したところ、『親子の信頼関係』では「3. 結婚・子ども無・就業継続」<「4. 結婚・子どもあり・就業継続」「5. 結婚・子どもあり・専業主婦」「6. 結婚・子どもあり・仕事中断→正規雇用」「7. 結婚・子どもあり・仕事中断→非正規雇用」、『協調的対人関係』では「1. 非婚・子ども無・就業継」「3. 結婚・子ども無・就業継続」<「5. 結婚・子どもあり・専業主婦」「6. 結婚・子どもあり・仕事中断→正規雇用」「7. 結婚・子どもあり・仕事中断→非正規雇用」、『社会的関心』では「7. 結婚・子どもあり・仕事中断→非正規雇用」<「4. 結婚・子どもあり・就業継続」「6. 結婚・子どもあり・仕事中断→正規雇用」、『生活身辺処理』では「5. 結婚・子どもあり・専業主婦」「7. 結婚・子どもあり・仕事中断→非正規雇用」<「4. 結婚・子ど

Table 6 自立下位尺度のキャリアプラン別の平均値および分散分析の結果

キャリアプラン	N	親子の信頼関係	協調的対人関係	社会的関心	主体的自己	生活身辺処理	経済的自活
1. 非・子無・継	19	18.89(3.73)	13.89(2.56)	12.61(4.09)	13.84(2.87)	8.11(3.36)	10.10(3.87)
2. 非・子有・継	0	—	—	—	—	—	—
3. 結・子無・継	9	15.89(6.92)	13.11(3.55)	14.56(5.43)	13.67(3.31)	8.11(2.93)	8.89(3.69)
4. 結・子有・継	107	21.15(3.21)	15.68(2.90)	14.10(3.81)	15.13(3.19)	10.02(3.32)	9.01(3.12)
5. 結・子有・主婦	36	20.44(2.90)	16.22(2.14)	13.17(4.24)	14.53(2.46)	7.53(3.04)	9.08(3.03)
6. 結・子有・再 (正)	64	21.11(3.38)	15.98(2.54)	14.37(3.88)	14.95(2.95)	9.17(3.07)	9.44(3.14)
7. 結・子有・再 (非)	120	21.19(3.15)	16.25(2.25)	12.45(3.30)	14.44(2.35)	8.46(2.93)	8.64(2.90)
F値		5.84***	5.15***	3.45**	1.45	5.08***	1.06
多重比較の結果		3<4,5,6,7	1,3<5,6,7	7<4,6		5,7<4	

() 内は標準偏差。* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$
キャリアプランの選択肢は略記であり Table 1を参照

Table 7 職業観下位尺度のキャリアプラン別の平均値および分散分析の結果

キャリアプラン	N	人間関係	やりがい	経済的安定	プライベート重視	男女平等の環境
1. 非・子無・継	17	18.41(2.94)	15.94(2.22)	19.82(3.34)	18.12(2.83)	12.76(1.64)
2. 非・子有・継	0	— —	— —	— —	— —	— —
3. 結・子無・継	7	16.57(5.97)	14.71(2.36)	19.29(3.15)	17.43(2.70)	11.57(2.15)
4. 結・子有・継	90	21.36(3.31)	17.08(2.48)	19.86(3.35)	16.20(3.43)	12.81(2.09)
5. 結・子有・主婦	31	20.19(2.86)	16.17(2.76)	19.81(3.06)	17.71(2.75)	12.10(2.15)
6. 結・子有・再(正)	56	21.42(3.01)	17.18(2.37)	19.70(3.20)	17.41(2.43)	13.14(1.55)
7. 結・子有・再(非)	99	20.98(3.02)	16.24(2.95)	19.67(2.39)	17.30(2.71)	11.98(2.31)
F値		5.69***	2.58*	.08	2.64*	3.34**
多重比較の結果		1,3<4,6,7				7<6

()内は標準偏差。* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

キャリアプランの選択肢は略記であり Table 1を参照

もあり・就業継続」という結果が得られた。『主体的自己』と『経済的自活』では有意差は見られなかった。将来子どもを持たないと予定している人は、親との関係や対人関係が良好と認知していない傾向が、また、将来非正規雇用でも良いと考える人は社会的関心が低く、専業主婦や非正規雇用を想定している人は家事に関する自立度が低い傾向が示唆された。

キャリアプランを独立変数に、職業観尺度の各下位尺度を従属変数として、分散分析を実施した。その結果、『人間関係』、『やりがい』、『プライベート重視』、『男女平等の環境』に有意差が見られたが、『経済的安定』には見られなかった (Table 7)。多重比較 (Turkey 法) を実施したところ、『人間関係』で「1. 非婚・子ども無・就業継」「3. 結婚・子ども無・就業継続」<「4. 結婚・子どもあり・就業継続」「6. 結婚・子どもあり・仕事中断→正規雇用」「7. 結婚・子どもあり・仕事中断→非正規雇用」、『男女平等の環境』で「7. 結婚・子どもあり・仕事中断→非正規雇用」<「6. 結婚・子どもあり・仕事中断→正規雇用」という結果のみが示された。将来子どもを持つことを予定していない人は、職場での良好な人間関係を期待しない傾向が示唆された。また、将来非正規雇用で働くことを予定している人は、男女平等の職場環境を想定していない傾向が見られた。

PGD に関しては、有意差が得られなかった。

考 察

・女子大学生にとっての自立とは

大石ら (2008) の自立尺度では、「共生的親子関係」因子が抽出されたが、本研究では、「自分の意志を親にはっきりと言える」などの項目が混合して構成され、共生的というよりはより主体的な関係が表れていたため、『親子の信頼関係』と名付けた。現在の大学生の「自立」した親子関係は、従来の分離独立とは異なり信頼関係が基盤であることが示唆された。また大石ら (2008) の研究では、「規則正しい生活をする」、「自分の健康状態に注意を払っている」などの項目から成る「生活管理」因子が抽出されたが、今回は抽出されず、全部で6因子となった。5因子の信頼性係数は.70を超えており十分な信頼性を有していると考えられるが、「経済的自活」因子の信頼性係数は.56と低かった。「経済的自活」因子の項目は現在の経済状況を問

う質問が多いが、「家にお金を入れている」に対して「全くあてはまらない」と回答した人が80.9%、「自分で生活できるだけの収入を得ている」に対しては46.1%と、回答に偏りが見られた。現代の日本では経済的に自活している大学生は少ないので、経済的自立度を測定する項目にはより工夫が必要であると考えられる。

男女込みの分析（荻野・松並, 2014）でも、同様の因子構造が確認されているが、本研究の女性のみの分析では、「自分のことを気にしている」という項目は因子負荷量が低く削除された。また荻野・松並（2014）で本尺度の性差を検討した結果、『社会的関心』因子得点のみが男性が有意に高いという結果が得られ、自立の程度に大きな性差はないことが示唆された。しかし、「早く親から独立したい」という項目と各因子の相関を検討したところ、男女で大きく結果が異なり、男性では他因子との関連が強く、特に『主体的自己』が強く関連するのに対し、女性では他因子との関連、特に『主体的自己』との関連は弱く、また『親子の信頼関係』とは負の関連を示していたことが報告されている（荻野・松並, 2014）。以上の結果から、男性にとっては、親から独立することは全般的な自立に関連するが、女性にとっては、親からの独立欲求を持つことは自立と関連しないことが示された。若い女性と母親との仲の良さについては「一卵性母娘」などと揶揄されるほど話題になっており、実証研究においても、母と娘の絆・依存は顕著に強いことが報告されている（渡邊, 1995）。女性にとっての自立とは、親からの独立ではなく、むしろ親の面倒をみることや親との良好な関係を維持することなのかもしれない。水本・山根（2010）は、母親との心理的距離が近い女性は精神的適応度が高く、精神的自立度もむしろ高いと述べており、女性にとっての親からの独立欲求は親との関係の悪さを反映したものであるとも考えられる。

・女子大学生にとっての職業観とは

女子大学生を対象とした先行研究（加藤ら, 2011）では、当初「女性の働きやすさ」因子として設定されていた項目のうち、「プライベートに支障が出ない働き方をする」などの項目は「生活の安定」因子に、「性別による差別が出ない仕事をする」などの項目は「自己実現」因子に含まれており、結果的に、「女性の働きやすさ」因子は抽出されなかった。また、「重要な責任を負う仕事はしない」などの項目から成る「否定的職業観」因子が抽出されていた。本研究では、「プライベートに支障が出ない働き方をする」などの2項目と「否定的職業観」因子に含まれていた3項目が1つの因子として抽出されたため、『プライベート重視』因子とした。また、「性別による差別が出ない仕事をする」などの3項目はそれだけで1つの因子を成していたため、『男女平等の環境』因子と名付けた。先行研究と比べると、女性特有の職業観がより浮き彫りになったと考えられる。男女双方を対象にした研究では、職業より個人の生活を重視するような因子や平等な職場環境に関する因子は抽出されておらず（松本, 2008；小川・中島, 2015）、男女で職業観は異なることが示唆された。

・自立と職業観、依存的自己愛の関連

依存的自己愛と自立との関連は全体に弱く、主体的自己や経済的自活とは負の関連が見られた。先行研究でも、依存的自己愛は自尊感情や基本的信頼感との間に有意な負の相関を示すことが報告されているが（松並, 2014）、本研究でも依存的自己愛が強い人は自立していない傾

向が示唆された。依存的自己愛と職業観との関連では、男女平等の職場環境を期待する因子以外の因子との間に弱い相関が示され、特に『人間関係』因子との間の相関が最も強かった。依存的自己愛は不適応性の指標と考えられたが、職場の人間関係を重視していることとは関連していることが示唆された。一方、先行研究では子どもの頃の親子関係が基本的信頼感に影響を与え、基本的信頼感が依存的自己愛に負の影響を与えるという因果関係が見られたが（松並・青野・赤澤・井ノ崎・上野，2012）、本研究では、『親子の信頼関係』との関連は見られなかった。

職業観下位尺度の相互相関からは、①人間関係を重視する人はやりがいがある仕事を求め、男女平等の職場を期待するという傾向と、②仕事よりもプライベートな時間を大事にする人は経済的な安定を重視するという2つの傾向が見られた。また、上記①の傾向は自立尺度の『親子の信頼関係』、『協調的対人関係』、『主体的自己』との関連が見られたことから、親子関係や人間関係において自立し、しっかりした自己をもっている人は、仕事に関する期待が高いと考えられる。一方、上記②の傾向と自立との間にはほとんど相関は見られなかった。また、自立尺度の『経済的自活』と『生活身辺処理』と職業観尺度の間にもほとんど相関が見られなかった。自立には心理的な側面だけではなく、社会的、経済的側面も含まれると考えられるが、本研究では、金銭や家事に関する自立と職業観にはほとんど関連がないことが示唆された。ただし、『社会的関心』については、職業観の『人間関係』と『やりがい』との間に弱い相関が、『プライベート重視』の間には弱い負の相関が見られたので、社会の出来事に関心を持つことと職業観には関連があると考えられる。

・キャリアプラン選択率について

結婚、出産後も就業継続を予定している人は全体の37.7%であった。先行研究でも、結婚・出産後もそのまま就業継続を予定する女子大学生は40.2%（Nishio & Matsunami, 2012）となっており、4割前後の女子大学生が働き続けたいと思っていると考えられる。18～39歳の未婚者を対象にした調査においては、1987年では両立コースを「理想」としている女性は18.5%、「予定」の人生と考えている女性は15.3%となっていたが、今日では両立コースを「理想」としている女性は30.4%、「予定」の人生と考えている女性は23.5%となっており、ここ20年余りで就業継続を志向したり予定する女性はかなり増加している（厚生労働省，2013）。一方、「理想」と「予定」の選択率に差があることから、「ずっと働き続けたいが、それを実現するのは難しい」と考えている女性が依然として少なくないことが示唆されている。また、仕事をいったん中断した後、復帰する際に非正規雇用を予定する人は正規雇用を予定する人よりも多かった。城島・白河・幸田（2012）でも子育て後正社員として復帰の予定が12%、非正規で復帰の予定が26%と、やはり非正規雇用での復帰予定の方が多かった。現在の日本社会では、一度辞職した場合、正規雇用での復職は難しいとされている。また、正規雇用で男性と同等に働きながら家事や育児を担うのは至難の業でもある。そのような社会状況を反映した結果であるといえるであろう。

専業主婦志向は全体の10.6%であった。城島ら（2012）では11%、Nishio & Matsunami（2012）では15.5%だったので、専業主婦を希望する人は1割前後だと思われる。厚生労働省

(2013)によると、専業主婦を「理想」のライフコースとしている女性は、最近、若干増加している一方、専業主婦を「予定」している率は減少し続けており、「仕事を辞めて専業主婦になりたいが、現実には無理だろう」と考えている人も多いことが推測される。

非婚予定の人は全体の5.3%であった。Nishio & Matsunami (2012)でも4.8%であることから、5%前後の女子大学生が結婚を予定していないと考えられる。厚生労働省(2013)の調査では、非婚就業コースを「理想」としている女性は5.1%、「予定」している女性は20.3%となっており、理想と予定に大きな差が見られた。「結婚せずに働き続ける人生は理想ではないが、現実にはそうなりそうだ」と考えている人が増えており、また実際に社会に出て就業することにより、その思いが強まるのではないかと推測される。

四年制大学生と短期大学生の比較では、「3. 結婚・子ども無・就業継続」と「4. 結婚・子どもあり・就業継続」は四年制大学の選択率が多く、「6. 結婚・子どもあり・仕事中断→正規雇用」は短大生が有意に多かった。上野(2012)は、四年制女子大学生、男子大学生、女子短大生を対象に調査した結果、女子短大生にとって、仕事は結婚・出産するまでの一時的なものであり、彼女らはあくまでも家庭を中心とした将来像を描いている一方、女子大学生の将来像は、仕事中心の男子大学生と女子短大生の間位置するものが多かったと述べている。本調査でも、四年制大学生は職業継続を念頭においてキャリアプランを考えている人が多かった。一方、就労中断後の再就職の際に非正規雇用を予定している率に有意差はなく、四年制の女子大学生であっても、男性と同等に働き経済的に自立することを予定している人は多くはないと考えられる。

・キャリアプランと自立・職業観の関連

「1. 非婚・子ども無・職業継続」と「3. 結婚・子ども無・職業継続」を予定する人には、自立尺度の『協調的対人関係』得点と職業観尺度の『人間関係』得点が有意に低かった。また、このキャリアプランを選択した人は『親子の信頼関係』得点も低い傾向が見られた。先行研究では、「非婚・子ども無・職業継続」群は自尊感情や基本的信頼感が低いことが報告されていることから(松並・西尾, 2013)、「将来子どもを持たない」と考える女性は親との間に信頼関係が築けておらず、そのことが自尊感情などに影響を与えており、自らを他者と協調的な関係を築くのが苦手なタイプと認知し、職場での良好な人間関係を重視したり期待しない傾向があることが推測される。別の先行研究でも、非婚就職コースを選択する女子大学生は将来の暮らし向きに悲観的であり、家族との情緒的な関係を持っていないと報告されている(竹田・山下・大石・正保, 2015)。このキャリアタイプを選択する女子大学生にはどのような特徴があるのか、また、どのような背景が関連しているのかなどについて、今後、詳細に研究する必要がある。さらに、女性が子どもを持ちたくないという理由としては、経済的・職業的な要因以外にも多様な理由が考えられるので、それに関してもより明らかにしていく必要があると考えられる。

また、「4. 結婚・子どもあり・職業継続」を志向する人は『社会的関心』得点と『生活身辺処理』得点が有意に高く、「家庭と仕事を両立できる」と考えている女性は社会に対する関心が高く、家事能力も高いと認知している傾向が示唆された。先行研究では、結婚・出産して

も働き続けたいというキャリアプランを持つ人は、自尊感情や自己や他者への信頼感が高く、かつ、経済的な自立心も強い傾向が見られたが（松並・西尾，2013）、本研究では、親子関係や対人関係、経済的自活との関連は示されなかった。『社会的関心』得点については、復職時に正規雇用を予定する人は非正規雇用を予定する人よりも有意に高いことが示されており、社会に関心があり社会状況をよく知っている人は、「働くのであれば正規雇用のほうが良い」と思っていることが示唆された。正規雇用予定者と非正規雇用予定者の差異については、職業観尺度の『男女平等の環境』でも有意差が示され、男女平等の職場環境を想定している人は正規雇用を予定する傾向が見られた。ゆえに、非正規雇用を予定する理由としては、女性でも活躍できたり昇進できるような職場は少ないだろう、あるいは、自分はそのような仕事には就けないうえに、と考えていることが推測される。

『主体的自己』と『経済的自活』については有意差が見られなかった。したがって、自分の意見を持っていたり自分のことをきちんと判断できることや、経済的に自立していることとキャリアプランには関連がないと考えられる。

・今後のキャリア教育と研究の展望

現在の日本社会では、女性も継続して働き続けることと同時に、少子化対策として、子どもを産み育てることも奨励されている。社会のためというだけではなく、女性自身やその家族が貧困に陥ることを防ぐためにも、女性を対象に有効なキャリア教育を実践することが必要である。嘉本（2004）は女子大学生には現代社会の問題を自らのこととして捉える力が不足しているので、彼女らに対する進路選択支援が不可欠であると述べている。本研究の結果においても、就労継続を志向する人や就労を中断しても正規雇用で復職しようとする人は、社会への関心が高いことが示唆された。社会に目を向けさせ、具体的な知識を身に付けられるような、女性全般に焦点を当てた「女性のためのキャリア教育」を展開していくことが重要であろう（山口，2011）。

一方、人間関係が良好な職場でやりがいのある仕事を持ちたいと思うことには、親子関係や対人関係が関連していることが示唆された。また、将来子どもを持ちたいと思うことにも親子関係や対人関係が関連していることが認められた。今後のキャリア教育では、単に知識を与えるだけではなく、労働者や女性の権利を理解させ、問題解決能力をつけることができるような「エンパワー教育」を実施する必要があると考えられる（柚木，2010）。

本研究では、自立の経済的側面とキャリアプランおよび職業観に関連は見られなかった。松並・西尾（2013）は、パートナーとの関係性を含めた経済的自立志向項目を作成し分析を行い、その結果、就労継続には経済的自立志向が関連していることを報告している。本来、経済的自立は就職および就労継続の基本的な動機となるはずである。今後は、経済的側面に関して、より項目数を増やすとともに、個々の項目を見直したうえで再検討する必要がある。

キャリアプランに関しては、四年制大学生と短大生の選択率に差異が見られた。今後は女子大や共学など多様な学生の違いを考慮しつつ、詳細な研究を進める必要がある。将来的には、男性の「自立」やキャリアプランとの比較も含め、多角的に研究を発展させていくことが望まれる。

引用文献

- 城島博宣, 白河桃子, 幸田達郎 (2012). 女子大学生の結婚観と職業観の調査 生活科学研究, 34, 149-158.
- 神谷ゆかり (1993). 女性における自立尺度の作成, 安田女子大学紀要, 21, 93-100.
- 嘉本伊都子 (2004). 女子学生のライフコース設定と就労意識—2003年度質的社会調査を通して— 京都女子大学現代社会研究, 7, 63-81.
- 加藤容子・小倉祥子・安立奈歩 (2011). 四年制大学進学女性のライフコース分析(1) —職業・子育て・結婚の価値観尺度の開発— 椋山女学園大学研究論集, 42, 163-176.
- 高坂康雅 (2003). 青年の心理的自立と家族機能との関連 日本青年心理学会第11回大会発表論文集, 44-47.
- 高坂康雅・戸田弘二 (2006). 青年期における心理的自立(Ⅱ) —心理的自立尺度の作成— 北海道教育大学紀要, 56(2), 17-30.
- 厚生労働省 (2013). 平成25年版厚生労働白書—若者の意識を探る—
<http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/13/> (2015年1月24日閲覧)
- Lapan, R. & Patton, M. (1986). Self-psychology and the adolescent process: Measures of pseudoautonomy and peer-group dependence. *Journal of Counseling Psychology*, 33(3), 136-142.
- 松本浩司 (2008). 高校生の職業観の構造と形成要因—職業モデルとの関連を中心に— キャリア教育研究, 26, 57-67.
- 松並知子 (2014). 自己愛の病理性の性差—他者への依存と自己誇大化— パーソナリティ研究, 22, 239-251.
- 松並知子・青野篤子・赤澤淳子・井ノ崎敦子・上野淳子 (2012). デートDVの実態と心理的要因—自己愛との関連を中心に— 女性学評論, 26, 43-64.
- 松並知子・西尾亜希子 (2013). 女子大学生のキャリアプランと進路選択に対する自己効力, 経済的自立志向, 基本的信頼感との関連 日本心理学会第77回大会発表論文集, 1229.
- 水本深喜・山根律子 (2010). 青年期から成人期への移行期の女性における母親との距離の意味: 精神的自立・精神的適応との関連性から 発達心理学研究, 21(3), 254-265.
- 中西信男・葛西真紀子 (1992). 現代青年の対人関係にみるナルシズム 青少年問題研究, 41, 1-18.
- Nishio, A., & Matsunami, T., (2012). "Career Planning from a Financial Perspective: An Investigation into Female Students' Attitudes to Work, Family and Money" *Journal of Proceedings of the Gender Awareness in Language Education*, 5, 38-58.
- 小川和久・中島夏子 (2015). 大学生の職業観の形成と職業指導に対する理解 東北工業大学紀要Ⅱ 人文社会科学編, 35, 21-25.
- 荻野佳代子・松並知子 (2014). 大学生の「自立」—自立における「親からの独立」の意味を含めて— 日本心理学会第78回大会論文集, 1253.
- 大石美佳・松永しのぶ (2008). 大学生の自立の構造と実態—自立尺度の作成— 日本家政学会誌, 59(7), 461-469.
- 竹田美和・山下美紀・大石美佳・正保正恵 (2015). 女子大学生の生活環境と将来設計 神戸松蔭女子学院大学研究紀要人間科学部篇, 4, 43-58.
- 上野淳子 (2012). ジェンダーおよび学歴による将来像の違い 四天王寺大学紀要, 54, 183-196.
- 渡邊恵子 (1995). 自立再考—女性の自立, 男性の自立— 柏木恵子・高橋恵子(編著) 発達心理学とフェミニズム, ミネルヴァ書房, 77-101.
- 山口理恵子 (2011). キャリア教育に関する試論—「女性キャリア」との関連から 城西大学経営紀要, 7, 137-148.
- 柚木理子 (2010). 若い女性の生きにくさについて—若年女性に対する「キャリア教育」に関する一考察— 川村学園女子大学女性学年報, 5, 26-39.

付 記

本研究の一部は、日本心理学会第78回大会（2014年）にて発表された。

（原稿受理日 2015年9月27日）